

■人間文化セミナー

☆演題☆

番客・番客嬢・出世仔 — 唐山と呂宋の間

と き：2021年11月18日(木) 10：40～12：10
 場 所：滋賀県立大学 交流センター研修室1～3
 対 象：学生・教職員
 講 師：宮原暁氏(大阪大学大学院言語文化研究科)

宮原暁先生をお招きし、「番客・番客嬢・出世仔—唐山と呂宋の間」と題してご講演いただきました。宮原先生は、社会人類学、並びに Sinophone Studies がご専門で、フィリピンの「華僑華人」の家族・コミュニティや、ジェンダー、そして文学の研究をされています。

東南アジアの華僑華人(南洋華僑)というと、華僑華人人口の比率や絶対数の多いシンガポールやマレーシア、インドネシアが思い浮かびます。しかし、フィリピン諸島の「華僑華人」は、絶対数や人口比率こそ少ないものの(130万人、人口比1-1.5%)、福建省晋江県を出身地とするという点や、初期の移民から「苦力」ではなく、商業に従事していたという点で、他の東南アジアの華僑華人とは異なる特色を持っています。今回の講義では、福建省からの大量移民が始まる1850年前後から、冷戦初期の1952年までを射程に、移民とその子孫の社会史を概説してくださいました。その上で、「華僑華人」の社会的現実を研究する視点について、東南アジアの他の華僑華人の場合と比較しながらお話しくださいました。

講演ではまず、ある地域の出身者が移住し、移住

社会の××出身者として「華僑華人」対象化することの不適切さが指摘されました。また、ディアスポラとは、物理的な場所と結びつく区切られた共同体、中心と周辺、ある地域の中で対象化できない存在であることも、合わせて説明されました。

題名の「番客」とは福建省から東南アジアへ移住した人々のことを言い、「番客嬢」とはその移民の妻となった女性のことを言います。前者はフィリピンへ移住し、結婚のため一時福建省の故郷に戻りますが、人生の大半をフィリピンで暮らしました。そして現地にて、別の女性とも結婚し家族を形成し、故郷には送金を続けました。その一方、「番客嬢」は福建省で婚家を守り、不在の夫を待ち続けました。長年不在の夫との間に子供が誕生しなかった女性も多く、彼女たちの靈魂の祭祀は女神信仰の隆盛へとつながりました。

参加した学生は、フィリピンの歴史において、中国にルーツを持つ上流階級がいかに活躍したのかというお話に驚くとともに、対象化の仕方を疑ってみるといったメッセージをしっかりと受け取ったようです。

(横田祥子)

☆演題☆

スポーツ業界で働く栄養士の仕事
 ～現状と将来の展望～

と き：2021年12月10日(金) 16：30～18：00
 場 所：滋賀県立大学 A4-205 又はライブ視聴
 対 象：学生・教職員
 講 師：橋本恵氏(株式会社 OTOMO / OTOMO.EUROPE.S.L 代表取締役社長)

橋本恵先生が住むスペイン・バルセロナと ZOOM で繋ぎ、オンラインライブ形式で「スポー

ツ業界で働く栄養士の仕事～現状と将来の展望～」と題してご講演いただきました。橋本先生は2014

年に株式会社 OTOMO を創業し、会社と個人契約を結んだプロのスポーツ選手の栄養面をサポートする「スポーツ栄養士」として活躍されています。

管理栄養士・栄養士の活躍する業界の中で「スポーツ栄養」は学生にとって人気のある分野ですが、その業界へ入っていくための入口や具体的な仕事内容（どこまでが仕事か）がはっきりしません。そこで橋本先生のこれまでの軌跡を含めて、スポーツ栄養士としての仕事内容ややりがいについてお話しして頂きました。選手が良い成績を取られるように栄養面を強化する仕事、というのが一般的に想像するスポーツ栄養士の仕事です。実際にお話しいただいた内容では、選手の自宅で食事を作るなど、

思っていたよりも選手の私生活に入っていることが分かりました。ほかにも食事の作り置きや、時差がある国へ試合などに行く時は体内の抹消時計を合わせるために食事を摂るタイミングを指示するそうです。選手の好き嫌いや験を担ぐことわりに対応し、時に諫め、食事を楽しませ、選手が栄養面で自己管理できるように料理を教え、健康診断の検査結果を見て食事内容を変えたりもするそうです。定時の仕事ではない、マニュアルもなく何が正解か分からない、選手の行く先が仕事場となるなど、好きでなくてはできない仕事であることがよく解りました。

(佐野 光枝)

☆演題☆

人間レベルの会話ロボットの実現へ向けた 取り組み～会話分析の知見を活かして～

と き：2022年1月24日(月) 13:10～14:40
場 所：滋賀県立大学交流センターホール
対 象：学生・教職員
講 師：井上昂治氏(京都大学大学院情報学研究科助教)

井上先生はERICAという人間酷似型ロボット(いわゆるアンドロイド)を用いた音声対話システムの研究開発に携わっています。ERICAは以前にマツコロイドというロボットとともにTVにも登場していた大阪大学の石黒浩先生が開発したもので、ERICAを用いた科学技術振興機構のプロジェクトには井上先生ご所属の京都大学音声メディア研究室も参加していました。私自身も当時はこの研究室で井上先生と同僚でした。

「なぜロボットの開発の話人間文化セミナーで？」とお思いの方もいらっしゃるかもしれません。もちろんロボット本体は機械工学や電子工学などの最新技術を用いて製作されています。しかし、こうしたロボットがいざ人間と自然な会話をするとすると、工学技術だけでは歯が立たず、人間同士のコミュニケーションに関する心理学・社会学・言語学などの人文系分野の知見から学ぶしかなくなるのです。井上先生のご講演のポイントも「アンドロイドを用いて音声対話の研究をする」という点にありました。まさに学際融合といえるでしょう。

ご講演では、既に社会に普及しつつあるスマートスピーカーなどではなく、なぜアンドロイドという人間酷似型ロボットを開発する必要があるのかや、

傾聴や面接といったコミュニケーションロボットの導入が見込まれる社会領域の紹介といった、工学研究の現代社会との関わりに始まり、こうした場面で必要とされるコミュニケーションスキルの要件、そしてそれらの要件を満たす情報処理技術の開発のためにどのような人文科学的知見が既に参照されており、今後さらにどのような知見が求められるかといった点について、ERICAとユーザーとの対話場面の動画もふんだんに盛り込んで、分かりやすく具体的にお話しいただきました。

今回のセミナーは人間関係の科学Bという人間学(全学共通)科目の授業と兼ねていたこともあり、全学部の学生が参加するものとなりました。いずれの学生も、研究レベルでのロボット開発が想像よりはるかに進んでいることに驚くともに、技術的側面にさらに関心を持つ者、人文系の長年の研究成果が最新の工学研究にも寄与していることを知った者、看護などの現場への将来の導入やその社会的是非について想像を巡らす者など、所属学部・学科の性質にも応じた多様な反応が見られ、教育面でも有意義な機会になったのではないかと思います。

(高梨 克也)

☆演題☆

森の哲人「オランウータン」と 私たちの暮らしを考える

と き：2022年1月28日(金) 14:50～16:20
場 所：Zoom ミーティング、及び、滋賀県立大学 A4-205 講義室
対 象：学生・教職員・一般市民
講 師：久世濃子氏 (NPO 法人日本オランウータン・リサーチセンター設立理事/
一般社団法人海外環境協力センター研究員)

久世濃子先生は自然人類学・動物生理化学を専門にし、国内外で活躍する著名なオランウータン研究者である。主な御著書である『オランウータン——森の哲人は子育ての達人』（東京大学出版会、2018年）と『オランウータンに会いたい』（あかね書房、2020年）は多数のメディアに取り上げられ、後者については、厚生労働省社会保障審議会特別推薦図書や2021年度青少年読書感想文コンクール課題図書などに選出されるなど、年齢と専門を越えて幅広く読まれている。久世先生は、過去22年にわたって、マレーシアのボルネオ島の熱帯雨林で、オランウータンの生態について現地調査を行ってこられた。主要な研究課題は、大型類人猿の雌の繁殖生態で、出産間隔を調整するメカニズムを解明する為に、飼育下および野生下で、生理学・行動学・生態学・形態学など様々な手法を駆使して研究されている。

今回開催したセミナーでは、オランウータンの生態に関する最新の知見を昨今の環境問題に関連付けて学生にも分かり易い形で講演していただいた。前半部では、オランウータンに関する人類学的な研究成果が報告された。具体的には、オランウータンが生息するボルネオ島の熱帯雨林と、インドネシアのスマトラ島の熱帯雨林に住むオランウータンの生態の相違が明らかにされ、同じ種でありながら、両者が異なる「文化」を持つことが示された。高度な知能を持つオランウータンの生活形態は場所によって異なっている。例えば、スマトラ島の森の一つスワク・バリンビに住むオランウータンは唯一、ネイシア（ドリアン仲間）の実を食べる際に道具（木の枝）を活用する。また、スワク・バリンビに加え、もう一つのスマトラ島の森であるケタンベでは、スローロリスなどの夜行性の小型サルが食されるといった他の森では見られない特殊な食行動が報告されている。また、オランウータンは概して静かな動物であるが、怒った時や警戒している時に、唇をとがらせて息を吸い「キス・スクゥイク（キス鳴き）」という鳴き声を上げるが、この「鳴き方」が地域によって大きく違うのである。

例えば、ある地域では、片手をまるめて口元に持ってきて、ラッパのようにして鳴く。別の地域では、キス鳴きをするときに、片手に葉をいっぱい握って、鳴きながら手を広げ、葉がハラハラと落ちていく。このような「文化」の相違は、人間を含むヒト科動物の進化の謎を解く重要な示唆を与えうる。

講演の後半では、昨今オランウータンが、絶滅の危機に瀕しており（オランウータンは国際自然保護連合の「絶滅のおそれのある野生生物のリスト」で、世界で最も絶滅の危険がある動物である「絶滅危惧種（EN）」に指定されている）、このことが、実は日本人の日常生活にも密接にかかわっていることが示された。かつては中国南部、ベトナム、タイ、マレーシア半島などを含めて、東南アジア一帯に100万頭以上が生息していたオランウータンは、現在ではボルネオ島とスマトラ島の一部の森に僅か数万頭が生息するのみとなっている。これは20世紀後半以降の工業化・産業化の影響によるものだが、その減少のスピードに拍車をかけたのが、1990年代以降に起こっているオイルパーム農園のための森林皆伐である。私たちが日常に手にする多くの食品や日用品（化粧品、洗剤、シャンプーなど）の原材料には、「植物油脂」という文字が書かれている。この正体が、パーム油なのである。パーム油はモノカルチャーによる大量生産に向いていることと、その汎用性の広さから世界で最も多く消費されている植物油である。私たちの日常生活は東南アジアの環境破壊の現実に根深く依存しているのである。

講演の最後では、このような状況に対して、私たちが具体的に何をできるのかという案が提示された。NPO組織「持続可能なパーム油のための円卓会議」（RSPO）の活動や森林製品の認証マークの紹介があり、一人一人が日々の買い物をするときに、価格を見るだけでなく、その製品が何を使って、どうやって作られているのかを、立ち止まって考える必要が語られた。

セミナーには学生・教職員・一般市民を合わせた110名が参加し、フロア（オンライン）との活発な交流のある充実した時間となった。（間 永次郎）